

モラエスと日本語文法書

鯀 澤 千 鶴

Wenceslau de Moraes and his Japanese grammar book

Chizuru KAJIKAZAWA

Wenceslau de Moraes is a Portuguese writer living in Japan for over 30 years. Depicting the delicate beauty of Japan, he is as famous as Koizumi Yakumo. In this article, I introduce his favorite Japanese grammar book “Grammaire Japonaise” published in 1899 by Balet. This book is very convenient for French users, with theoretical underpinning explanation. Beside there are abundant of lively examples, detailed notes to dialects and slang. It is an excellent grammar book that counted 4 editions by 1925.

モラエスは日本に30年以上住んだポルトガルの作家である。日本の繊細な美を活写して小泉八雲と並び称されている。本稿ではモラエスの愛用のバレー著1899年刊行『日本語口語文法』を紹介する。この文法書はフランス語使用者にとって大変便利で、かつ理論的な裏付けのある説明が付されている。用例文はいきいきとして、方言や俗語への注記も詳しい。1925年までに4版を重ねた優れた文法書である。

1・はじめに

ヴェンセスラウ・デ・モラエス¹はポルトガルのリスボン生まれの作家である。日本の繊細な美意識を理解したところが評価され、1983年には

1 Wenceslau de Moraes (1854 - 1929)

パウロ・ローシャ監督²により『恋の浮島』³という映画も作られている。モラエスの作品に関する評論、解説は数多いが⁴、モラエスの日本語については、充分検討されているといえない⁴。これはモラエスが日本で長期にわたって生活していたにもかかわらず、日本語が流暢ではなかったこと⁵に起因しているようだ。本稿ではモラエスの蔵書にある日本語文法書、バレー⁶による『日本語文法』⁷を紹介し、モラエスの学んだ規範的日本語を追う。

2・モラエスについて

モラエスは1854年ポルトガルの首都リスボンの旧家の長男として生まれ、海軍兵学校を卒業後、ポルトガル領のモザンビーク、チモール、マカオに赴任した。マカオではマカオ港務副指令として勤めるかたわら、セミナリオ・リセウ・デ・サン・ジョゼ⁸で数学と文学を講義した。その後、広東総領事などを歴任し、1899年神戸・大阪ポルトガル領事館の初代領事となる。翌年、徳島生まれの福本ヨネと結婚するが、1912年ヨネが病没すると、すべての公職を辞退し、徳島市で隠棲し、1929年75歳で亡くなった。

モラエスは若いころから、詩を書き、在任中に『極東遊記』⁹『大日本』¹⁰

2 Paulo Soares de Rocha(1935-2012) ポルトガルのポルト出身の映画監督。「恋の浮島」撮影中は駐日ポルトガル大使館文化担当官を務めた。

3 モラエスの生涯を軸に東洋と西洋の触れ合いを描いたもの。映像の幻想的な美とはかなさがモラエスの心中をよくあらわしている。モラエスの日本人妻を三田佳子が演じた。

4 モラエスの日本語については、つぎのものがある。①服部四郎(1953)「モラエスの日本語観」『思想』岩波書店。②鈴木重子(1996)「ワンセスラオ・デ・モラエスと日本語の翻訳」日本フェノロサ学会16③池内紀(2008)「二列目の人生・隠れた異才たち」集英社。④佐藤征弥ほか(2018)「ヴェンセスラウ・デ・モラエスの会話能力」地域科学8。

5 モラエス(2000)

6 Balet, Jean. Cyprien.(1869 - 1948)

7 Balet,J. C.(1899) Grammaire Japonaise .Tokyo,Sansai-sha.

8 Seminário-liceu de São José

9 Moraes(1895)Traços do Extremo Oriente, Lisboa, Libreria de A.M.Pereira.

10 Moraes(1897)Dai-Nippon: o grande Japão, Lisboa, Imprensa Nacional.

をリスボンで出版して好評を博していた。徳島時代には、『日本通信』¹¹『徳島の盆踊』¹²『おヨネとコハル』¹³『日本夜話』¹⁴『日本精神』¹⁵などの著書がある。同時代の在日外国人著述家にピエール・ロッティ¹⁶とラフカディオ・ハーン¹⁷があげられるが、モラエスは大いに異なっていた。ロッティにとって「近代化されていく日本は自分のエキゾティズムを破壊するものとして次第に憎悪の対象になったが、モラエスはそのような西欧人的エゴイズムから日本を決してみつめ」¹⁸なかった。そうして、ハーンが東大や早大で教鞭をとっていわゆる陽の当たる場に常において日本とかかわったのと比べて、モラエスは定職も持たずに自らの意思で日本に定住し、いわば自由人として暮らし、貧しく死んでいったのである。

また、モラエスは日本的なものに鋭い観察をし、日本的なものの美しさは個性より普遍性にあると看破して次のように言う。「日本画ではある特定の女性を描かないでひろく女性の普遍性を描き、特定の山を描かないで、広く山の普遍性を描き、特定のツバキを描かないで、広くツバキの普遍性を描く。つねに個を犠牲にして種を、特殊の場合を犠牲にして普遍的な姿を描く。模写しないで思いだすのだ。その作品は対象を生きうつしに描写するのではなくて、たしかに、一層めだった、いっそう示唆的なモチーフだけを強調するために微細な箇所が消えている追想なのだ。」¹⁹ こうしたモラエスの感覚の鋭さについては、井上靖氏も次のように賞賛している。「モラエスの短編において最も注目すべきことは、－それは文学者としての彼の資質であるに違いないのであるが－事物の本質を見る眼で物を見ているのではなく、対象の底の底まで降りて行ってその根元に横たわっているも

11 Moraes(1904)Cartas do Japão, Porto, Livraria Magalhães & Moniz-Editora.

12 Moraes(1916)O Bon-Odori em Tokushima, Porto, Livraria Magalhães & Moniz-Editora.

13 Moraes(1923)Ó-Yoné e Ko-Haru, Porto, Edição de A Renascença Portuguesa.

14 Moraes(1926)Os serões no Japão, Lisboa, Portugal-Brasil.

15 Moraes(1926)Relance d'alma japones, Lisboa, Livraria Bertrand.

16 Pierre Lotti (1850-1923)

17 Patrick Lafcadio Hearn (小泉八雲) (1850-1904)

18 遠藤周作・解説(1966)『底本モラエス全集巻二』東京、集英社。

19 モラエス、花野富蔵訳(1966)『日本通信』『定本モラエス全集巻二』東京、集英社。

のを見ようとしている。－中略－モラエスはその一つ一つに驚き、驚いたことを書き記す。ただそれだけなら異国情緒とか異国趣味とかいった範疇を出ないのであるが、モラエスは更に自分の驚きを見詰める。何に、いかにして驚いたか、自分の驚きを分析する、そしてもう一度対象に眼を当てる。そして改めて自分を驚かせた対象の持つ根元的なものを考え、それを書き写して行く。小説の形であれ、随想の形であれ、モラエスの書く物が、常に間違いなく文学であり、文明批評でもあるゆえんである」²⁰と。

死の3年前に書いた『日本精神』の第2章に「言語」²¹がある。そこで、モラエスは日本語についてのさまざまな特徴をあげているが、文中31行にわたって、バレー著『日本語文法』を引用している。そしてこの書のことをモラエスは「日本文法に関する傑作」²²と述べている。遺品目録²³にも記載されている事から『日本語文法』はこの初版であろう。本稿では今まで取り上げられなかったモラエスの日本語文法書を紹介し、モラエスが規範としていた日本語を探る。

3・バレー著『日本語文法・口語』

3-1 バレーについて

ジーン・シプリエン・バレーは1869年フランス南西部ロット・エ・ガロンヌ県クルーで1869年8月に生まれ、1948年にパリで死亡した。パリ外国宣教会の宣教師として来日し、通算6年ほど日本に在住したという。また、中国・インドシナ・ロシアにも長期間滞在した。1899年に『日本語文法』の初版をノエル・ペリー²⁴らが作った三才社から刊行している。評判がよかったようで、三版(1908)、四版(1925)と版を重ねた。

のちにバレーはジャーナリストに転向し、『MILITARY JAPAN』など

20 井上靖・解説(1966)『定本モラエス全集巻一』東京、集英社。

21 Relance da Alma Japonesa II Linguagem

22 sua excelente gramatica japonesa

23 新垣宏一・解説、モラエス翁蔵書遺品展示会陳列品目録、1935年復刊

24 Noël Péri (1865-1922)

英語, フランス語, スペイン語の5冊の本を上梓する²⁵。カンドウ神父²⁶は1930年にローマ法王ピウス11世が新聞記者に『若し使徒聖パウロが此20世紀に再来したならば, 必ずや新聞記者となったであろう』と話したことを紹介している²⁷。バレーのジャーナリストへの道もカトリック信者としての道にはずれるものではなかったと思われる。また, ”¿Que quiere El Japon? ¿Que quiere La China?” の前書きでは次のように言っている。「私はこの本で日本の弁護をしているわけではない。私は、日本の友人であり、日本を敬愛しているが、日本の弁護士ではないのである。歴史家として公平な立場で叙述している。もし、日本の味方になっているとすれば、その理由は日本がすばらしいからである。」バレーの日本最良をうかがわせる一文である。

3-2 バレー『日本語文法』の価値

カトリヌ・ガルニエ²⁸は、「フランスにおける日本語学の200年:1825-1995」²⁹において、19世紀初めから20世紀末までのフランスにおける日本語学の成長をつぎのように7つに区分する。

- 1・1825 - 1856 学問の誕生期
- 2・1856 - 1886 日本語学の起り
- 3・1886 - 1914 文法書と辞書の時代
- 4・戦争による停滞
- 5・1948 - 1970 新しい出発
- 6・1970 - 1978 文法から言語学へ
- 7・1978 - 1995 二つの潮流の時代

第1期の『学問の誕生期』にはランドレス³⁰がロドリゲスの『日本小文典』

25 LE JAPON MILITAIRE (1910), MILITARY JAPAN (1910), Le drame de l'Extreme-Orient (1932), ¿Que quiere El Japon? ¿Que quiere La China? (1932), conomie et les frânces du Japon dan le conflit avec la China (1938)

26 Sauveur Antoine Candau (1897-1955)

27 郭南燕(2018)『ザビエルの夢を紡ぐ』東京, 平凡社。

28 Catherine Garnier 東洋言語文化国立研究院で日本語学者として長らく教育研究に携わる。名誉教授。著書多数。

29 C.Garnier(2013).

30 Ernest Clerc Landresse(1800-1862) フランス 日本語学者

(1620) を初めてフランス語に翻訳した。これにより、ヨーロッパの日本語学の扉が大きく開かれた。しかし、ローマ字表記の日本語はフランス語式でわかりにくいというえ、ミスプリントも多く実用には程遠かった。第2期はフランス国立東洋言語学校の初めての日本語教授レオン・ド・ロウニー³¹の活躍が目覚ましい。ロウニーは口語だけでなく文語のテキストも刊行し、広くは日本学へ続ける試みを考えていた。

バレーは第3の「文法と辞書の時代」に分類される。この時期4冊の仏和辞典と3冊の和仏辞典が刊行された。とくにパリ外国宣教会のレ・マレシャル³²の和仏辞典とラゲ³³による仏和辞典は共に1000ページに及ぶ比類のないものであった。また次世代への先駆けとなる文法書が5冊出版される。そのうちの2冊がパリ外国宣教会のバレーによるものと前述のラゲによるものである。さらに、韓国語専門の外交官³⁴によるものがあり、ブリュッセルとドイツで出版されたものもある。このうち韓国語専門外交官によるものを除いて4冊は日本における生活体験に基づいて書かれている。なかでもバレーの文法書は重要であるとガルニエ女史は指摘する。なぜなら、従来のラテン語文法ではなく近代語文法にのっとり、学習者への丁寧な説明を目的としているからだという。この文法書は先のラゲの辞書とともに次の第4期『戦争による停滞』の時期にも増版を繰り返した。

フランスの日本語学はこのうち、シャルル・アグノエル³⁵によって「形態論」が究められ、第5期を迎える。さらに第6期には、マエー³⁶と雑誌「Travaux du Groupe de Linguistique japonaise」によって文法から言語学へ発展していくのである。そして第7期には日本語学の中の言語学と言語学の中の日本語学という二大潮流が現れる。

31 Léon de Rosny (1837-1914) フランス 言語学・日本語学者

32 Le Maréchal (1842-1912) フランス 宣教師

33 Raguet, Émile (1852-1929) ベルギー生まれ フランス 宣教師

34 Courant, Maurice (1865-1935) フランス 東洋学者

35 Haguenuer, (1896-1976) フランス 言語学・日本学者

36 Maës, Hubert (1938-1977) フランス 文学研究者

4・バレー著『日本語文法・口語』

4・1 目次

この文法書は、序文の次に品詞論の第一部と統辞論の第二部に分かれ、補遺として翻訳練習問題がついている。目次とその内容を簡単に掲げる。
序文

第一部 品詞論 p1～281

序 日本語概説（日本語の歴史、文字、漢字、標準語、勉強の仕方）
p3～14

第1章 音節文字（いろは・あいうえお・清音・濁音）・発音（母音・子音・音便）正書法（ヘボン式） p15～35

第2章 日本語の基本原則とその構成（日本語の7品詞・動詞、形容詞の語幹） p36～39

第3章 名詞 p40～74

第1節 普通名詞 ①名詞の分類 具象名詞・抽象名詞（もの・こと）・複合語・指小辞・増大辞・外来語 ②名詞と助詞の関係・性・数

第2節 他品詞（形容詞・副詞・後置詞・接続詞）から作られる名詞

第3節 固有名詞（人・物）

第4章 数名詞 p75～97

第1節 基数（和語由来・漢語由来）

第2節 助数詞（日・人・部・艇・貼・臺・服・杯・本・匹・俵・畳・荷・個・脚・軒・枚・面・名・連・輛・冊・隻・艘・隻・足・艇・頭・通・把・劑・群・袋・切・筋・柱・羽）

第3節 序数（目・番・番目をつける）日月・住所・分数・時刻

第5章 代名詞 p98～122

第1節 人称代名詞（第一人称・第二人称・第三人称）

第2節 代名詞と所有形容詞（人称代名詞＋後置詞『の』）

第3節 関係代名詞（日本語にはないのでフランス語で補う方法）

第4節 指示代名詞と派生代名詞（これ・あれ・かれ・それ）

第5節 疑問代名詞とその派生語（どれ・だれ・なに）

第6節 不定代名詞（接尾辞『カ、ゾ、トカ、トゾ、デモ、トモ』をつける）

第6章 形容詞 p123～149

第1節 構成と屈折語尾（日本語の形容詞の語尾はアイ、イイ、ウイ、オイの4形）（語尾がキ、ク、シ、イの場合の説明）

第2節 形容詞の種類 ①複合形容詞（動詞、名詞、形容詞につくもの）②接尾辞付形容詞（しい、ほい、な）③語尾にイ、キ、ク、シをもたないもの④ナイ、タイ、ベキ、ソウのつくもの

第3節 形容詞の級について（比較・最上級）

第4節 アル動詞と形容詞の結合（ながく ある）

追記 ①名詞＋「の」＝形容詞②準形容詞③接辞「タル」④「的」

第7章 後置詞 p150～179

第1節 本来の後置詞（は、が、の、に、へ、を、より、から、で、まで）

第2節 変形後置詞（まえに、よって、について）

第3節 二重後置詞（には、では、でもって、からに）

第8章 動詞 p180～251

第1節 動詞概説（語根・語幹・法と時制・形態・態・活用）

第2節 規則活用

第1活用 肯定態（申す）否定態（申さない・申さぬ）

第2活用 肯定態（見る）否定態（見ない）

第3活用 肯定態（あける）否定態（あけない）

第3節 不規則活用（ある・する・くる・ます）

それぞれの肯定態と否定態

第4節 第1活用の時制による文字変化（かく⇒かいて、とぐ⇒といで）

第5節 時制の形成と用途

第1項 肯定態の時制①不定語幹②分詞③過去④過去または不確定過去未来⑤条件過去⑥讓歩過去⑦反復⑧希求⑨命令⑩条件語幹⑪条件現在⑫讓歩現在⑬否定態⑭推量未来⑮肯定態・直説法現在

第2項 否定態の時制

第6節 動詞の型の違い（第1活用・第2活用・第3活用）

第7節 複合動詞について（名詞＋動詞、形容詞＋動詞、動詞＋動詞）

- 第9章 副詞について p252～266
 - 第1節 副詞の種類について (①副詞として機能する名詞②代名詞に由来する副詞③形容詞由来の副詞④分詞⑤オノマトペ⑥も, さぞ, さも等)
 - 第2節 時間の副詞
 - 第3節 数量と方法についての副詞
 - 第4節 肯定と否定
- 第10章 接続詞について (と, や, し, が, に・だの・の) p267～275
- 第11章 間投詞について p276～281
- 第2部 統辞論 p283～356
 - 第1章 構文の一般規則
 - 第2章 主語について (主語・主格・主題について)
 - 第3章 動詞について
 - 第1節 助動詞 (てある, ている) と補助動詞 (やる, まいる, いく等)
 - 第2節 「なる」と「する」動詞
 - 第3節 動詞の補語について (①能動動詞の補語②中性動詞の補語③受動動詞の補語④そのほか⑤動詞によって支配される動詞)
 - 第4節 受動態・可能態の注意
 - 第5節 否定態の注意
 - 第4章 数詞
 - 第5章 形容詞
 - 第6章 引用
 - 第7章 倒置・省略・シレブシス
 - 第8章 敬語表現
 - 第1節 敬語表現の小辞 (み・お・ご)
 - 第2節 称号ほか①家族関係 (敬語表現・謙讓表現) ②外部 (君・殿・さん)
 - 第3節 敬語動詞 (敬語表現・謙讓表現)
 - 第4節 敬語的表現 (おっしゃる, あそばす等)
- 補遺 p357～381

第1部	逐語訳練習
第2部	フレーズ選集
第3部	会話断章
第4部	文法分析
度量衡	p382
目次	p383 ~ 390
正誤表	p391

4・2 特徴その1 フランス語文法の跡

バレーの文法書は口語文法を目指し、非ヨーロッパの言語にギリシア・ローマ起源の文法をおしつけず、日本語の伝統の概念を尊重している。西洋文法には存在しても日本語にないものは、ないと明言する。たとえば、冠詞、名詞の格変化、性、数、そして関係副詞などである。しかしながら、フランス語文法に則って進めているところもある。例えば、品詞のたて方であり、文法用語である。

第1部第2章「日本語の基本原理とその構成」で日本語の品詞は7品詞であるといっている。名詞、形容詞、後置詞、動詞、副詞、接続詞、間投詞である。つまり、冠詞と前置詞は後置詞に、代名詞は各種名詞に、数名詞は接尾辞に充てられるというのである。しかしながら、第1部品詞論の品詞には、第4章に数名詞、第5章に代名詞がたてられている。数名詞は、第1節に和語基数、漢語基数の基数、第2節に漢語由来の「脚」をはじめとする特定のものにつく助数詞をあげ、第3節には序数をとりあげている。代名詞では、人称代名詞だけでなくフランス語文法に則った代名詞と所有形容詞、関係代名詞、指示代名詞、派生代名詞、関係代名詞の派生語、そして不定代名詞と続く。それぞれに当たる日本語を挙げ、フランス語使用者にわかりやすくしているわけである。

文法用語としては、属性形容詞（品質形容詞）*adjectifs qualificatifs*と代名動詞 *verbes pronominaux*、中性動詞 *verbes neutres* が挙げられる。

形容詞の性質として挙げられる「属性形容詞」という語を用いて次のように述べている。

- ・「属性形容詞」は常に修飾する名詞の前につく。うつくしい はな、しろい うま。

(統辞論・第1章一般規則)

- ・形容詞の四つの語尾のうちキで終わるものは、「属性形容詞」と名付けられ、クで終わるものは副詞的、シで終わるものは決定的な言い方、イで終わるものは「属性形容詞」でも副詞的でもある。(品詞論第6章形容詞)

また、フランス語文法に独特な「代名動詞」については、次のように記している。

- ・日本語には「代名動詞」が存在しないため、エルで終わる自動詞的動詞の多くはフランス語の再帰動詞でうまく翻訳する。

例:この しなものは よほど うれました cet article s'est très bien vendu. (品詞論 動詞・まとめ)

一方で、古い文法用語の「中性動詞」はつぎのように記されている。

- ・「中性動詞」は一般に直接補語を持たない。しかしいくつかのケースでは後置詞「を」に補語をつけることができる。

例:せんれいを さずかる、 ものを あずかる、(後略) (統辞論・動詞の補語)

4・3 特徴その2 チェンバレン³⁷の系譜

バレエは序文で「帝国大学のチェンバレン氏に謝辞を述べる。彼の学識と親切的な激励が頼りになった」と、述べている。チェンバレンの影響は大きい。インブリー³⁸、アストン³⁹、ヘボン⁴⁰、井上哲次郎⁴¹、高橋五郎⁴²の名前もあげている。

正書法については、「これはヘボンの辞書に用いられ、その後インブリー、チェンバレンやそのほか多くの人が用いた」⁴³とヘボン式を採用している。また、漢字については「井上哲次郎は漢字に反発したが、著者は

37 Chamberlain, Basil Hall(1850-1935) イギリスの日本学者 元東京帝国大学教授

38 Imbrie, William(1845-1928) アメリカの宣教師 日本の大学で教える

39 Aston, William George(1841-1911) イギリスの外交官・日本語学者

40 Hepburn, James Curtis(1815-1911) アメリカ医療宣教師

41 井上哲次郎(1855-1945) 哲学者

42 高橋五郎(1856-1935) 評論家・英語学者

43 Balet(1899)p35.

すべてを壊すより新しいものを加えた方がよいと考える。(日本語概説)⁴⁴と述べている。また、語彙の語源については、固有名詞の項では、「チェンバレンの研究で、これらの多くの名前はアイヌ語からつけられた」⁴⁵と述べているし、分詞の項では、「チェンバレンによればこの接尾辞(『て』)は完全な終わりを意味する『果てる』という動詞の一部であろう」⁴⁶と述べている。希求法の項でも、「チェンバレンによれば、『タイ』は形容詞『いたい』と同じで、行動を起こしたい、動詞に表現されていることを望むということである」⁴⁷と記している。また、語源については古典語にも及び、推量未来形のイカ - ウ(=いこう)のウは、古典語のひとつで、チェンバレン氏によれば、高橋五郎と意見の一致をみたという⁴⁸。インブリーについても、基数の特定の接尾辞は「チェンバレンにより、auxiliaires numéraux, インブリーによって, descriptifs numéraux と名付けられた」⁴⁹とし、関係代名詞の項では「インブリーは形容詞と呼ばれる現在・過去の動詞を長いリストにした」⁵⁰と、引用を重ねている。また、動詞の項では、「最近のアストンとチェンバレンの学術研究、琉球諸島に関する研究で」⁵¹という一文もあり、文法書編集にあたり、いろいろな研究書に目を通していたことがうかがわれる。

バレエはチェンバレンの影響を受けて、形容詞・動詞の活用の文法的な単位としてのBase「語幹」と語彙的な単位としてのRadical ou Racine「語根」を区別した。例えば、yomu(読む)ではyomが語根で、yomuが語幹である。外国人の日本語動詞の分析では、ロドリゲスをはじめとして語根をとるものが圧倒的に多い。語幹と区別しているのはチェンバレン、ヘボン、そしてバレエのみである⁵²。さらにバレエはこの語幹から日本語の

44 Ibid. Introduction p9.

45 Ibid. p72.

46 Ibid. p215.

47 Ibid. p223.

48 Ibid. p250.

49 Ibid. p82.

50 Ibid. p108.

51 Ibid. p187.

52 金子弘(1992).

様々な語彙が合成されると考えた。たとえば、形容詞の「早い」の「はや」という語幹からは、はやばやと（副詞）、はやき（属性形容詞）、はやし（決定的形容詞）、はやく（副詞）、はやさ（抽象名詞）、はやみ（抽象名詞の一種）、はやる（中立動詞）、はやり（前述動詞の base 形）、はやまる（中立動詞）、はやめる（能動動詞）という具合である。また、動詞においても、この語幹の概念を用いて次のような動詞の要約表⁵³を作った。

第一活用	第二活用	第三活用
yomu	miru	akeru
Radical ou Racine (語根)		
yom	m	ak
Base (語幹)		
1 Indéfinie. (不定法) yomi	mi	ake
2 Condition. (条件法) yome	mire	akere
3 Négative. (否定) yoma	mi	ake
4 Positive. (原級) yomu	miru	akeru
Vox (態)		
1 Affirmat. (肯定) yomu	miru	akeru
2 Négat. (否定) yomanai yomanu	minai minu	akenai akenu
Formes (形態)		
1 Simple. (単純) yomu	miru	akeru
2 Potent. (可能) yomeru	mieru (irrég.)	akerareru
3 Pass. (受動) yomareru	mirareru	akerareru
4 Causat. (使役) yomaseru	miseru	akesaseru

この語幹から、動詞の活用は、時制や法の定型を加えていけばよいことになる。たとえば、規則活用の第一肯定活用「申す」は次のようにな

53 Balet(1899) p.189.

る⁵⁴。(翻字は筆者)

1. 不定・語幹 分詞 過去 過去又は不確定過去未来 条件過去 譲歩過去 反復 希求	申し 申して 申した 申したろう 申したら(ば), 申したれば 申したれど(も) 申したり 申したい
2. 条件・語幹 命令 条件現在 譲歩現在	申せ 申せ 申せば 申せど(も)
3. 否定・語幹 未来	申さ 申そう(申さう)
4. 原級・語幹又は直説法現在	申す

不定法の語幹が「申し」であるから、分詞は「申して」、過去形は「申した」、過去未来は「申したろう」、条件法の過去は「申したら(ば)」「申したれば」、譲歩法の過去は「申したれど(も)」、反復は「申したり」、そして希求は「申したい」となる。それぞれ、て、た、たろう、たら(ば)、たれば、たれど(も)、たり、たいを語幹に加えればよい。条件法の語幹は「申せ」であるから、命令形は「申せ」、条件法現在は「申せば」、譲歩法現在は「申せど(も)」となる。否定態の語幹は「申さ」であるから、未来形は「申そう(申さう)」となる。原級の語幹あるいは直説法現在は「申す」である。語幹に一定の接辞を加えれば、動詞の活用が完成する。

54 Balet(1899) p.190.

同様に否定活用は次のようである⁵⁵。

否定態 申さない又は申さぬ

3・直説法現在	申さない、申さぬ
過去	申さなかった、申さなんだ
過去又は不確定過去未来	申さなかったろう、申さなんだろう
推量未来	申さないだろう、申さぬだろう、申さな かろう（稀）
条件現在	申さなければ、申さぬければ、申さねば
条件過去	申さなかったら（ば）、申さなかったなら （ば）、申さなんだら（ば）
譲歩現在	申さなけれど（も）、申さぬけれど（も）、 申さねど（も）
譲歩過去	申さなかったれど（も）、申さなかったけ れど（も）、申さなんだれど（も）
反復	申さなかったり、申さなんだり
分詞	申さなくて、申さないで、申さずに（して）
4・未来	申すまい
命令	申すな
1・希求	申したくない

3・4・1は語幹の表の番号と同じで、それぞれ、「申さ」「申す」「申し」となる。動詞の活用はそれぞれの語幹に接辞を加えればよいわけである。

チェンバレンの語幹という概念を応用してさらにわかりやすく動詞の活用を解説している。フランス語使用者にはことのほか便利な活用表であったことだろう。

4・4 日本語らしい用例文

バレーの文法書の用例文はいきいきとした会話文にあふれている。学習書は使われてこそその価値が増える。学習者はすぐに使える用例文に喜んだことと思う。ここにそのいくつかの用例文を紹介する。太字はその語を用いての用例というわけである。

55 Balet(1899)p.191.

i 会話の断片

- ・あついこと!あついこと!
- ・よしよし
- ・いたって寒い国
- ・お気の毒さま (敬語表現)
- ・わたくしもお供を (いたします 省略)
- ・ご承知かね (ご承知 です かね 省略)
- ・答えないわけにはいかないから (二重否定)
- ・異議なし (形容詞・これは議会で使われるいい方)
- ・バカといわれましょうか (受動)
- ・人の気にさわりますまい (補助動詞)
- ・そんなバカ者があるものか
- ・いやはやあきれたことだ
- ・どっこいしょ (間投詞)
- ・こらあ (間投詞)
- ・どうしたら (ば) よかろう
- ・頭のとっぺんから足のつまさきまで
- ・かくいう 私をはじめ
- ・わかるは わかっております
- ・ちょっとうかがいとうございます (たい)
- ・おれを 貧乏神の なんのと ののしって!
- ・警察から忠告があれば
- ・神とも仏とも申してよい大の恩人

ii 会話文

- ・ついては おはなし なさるのは 何でございます?
- ・及ばずながら、おてつだいにまいりました。
- ・正直とはいいいながら ずいぶん不親切に見えます
- ・ぼくの おやじは ぐわんこ (頑固) で こまります。
- ・21 艘の軍艦が旅順港に集まりました。
- ・風月堂で製したくわし (菓子) はうもうございました。
- ・わたくしは負けるものか、女なぞに! (倒置)
- ・名古屋の七宝焼きにしましょう、上等ですから。(倒置)

- ・ご膳ができたときに呼び鈴をならすがいい。
- ・大蔵省だと聞いております。東京では一番でした。
- ・日本の住まいは雨露さえしのげばよいというようなわけでざっとしたものです。
- ・ほめられてはようございますけれども（ございますれど）誉れは誹りの素ですから、怖いんです。
- ・封建時代というものはいわば無理が通れば道理がひっこむわけでございました。
- ・今のおはなしは決してほかへもありません
- ・ご勘弁くださいと言っても どうしても 勘弁のならないことじゃないか？
- ・どうも おまえは このごろ様子が変だ
- ・貧乏人をいやしめて金持ちにへつらうは醜いことだ（直説法現在）
- ・真か嘘かわかり次第申し上げます
- ・ただで出してやろうといっても受け取れないはなしだ。
- ・藤本さんに会ったらね、うちのおとつあんがよろしくと言ったとそう申してくれる。（二重引用）
- ・おかずはうで卵に塩焼きにトリにしましょうか。それにビールを差し上げましょうか。
- ・食べたり飲んだり寝たりしておって、うちの用向きを一向とんじゃくしない男でございます。
- ・熱だけは冷めたがまだ寝たり起きたりして以前どおりになりません。
- ・それくらいの話なら勘弁ができないことはないが、もっとひどい事をした。

Ⅲ 対話

- ・「いいのと悪いのを まぜたのでしょうか」
- 「いいえ、まぜはしませんよ。」
- 「いいえ、まぜました。」
- ・「お茶で いいんでしょうか」
- 「さよう お茶でもなんでも・・・」
- ・「お店は 相変わずさかんですね」
- 「もとより そうではなかったけれども おかげさまで・・・」

- ・「いつ うかがいましょうか」
「いつ なんどきでもようございます。」
- ・「いつ でかけましょうか」
「ただいま まいりましょう」

4・5 特徴その4 行き届いた注記・説明

文法の説明は、実用的で細かいところにも神経が行き届いている。たとえば、①意味が複数あるもの、②発音に気を付けるもの、③言い換えられるもの、④前後関係で変わるもの、⑤混同を注意するもの、⑥時代遅れの言い方や俗語・方言への注意、また⑦使用を禁止するものなどに丁寧に対応している。次に実例を挙げる。

①意味が複数あるもの

- ・人称代名詞—一人称

「しかし、代名詞ではなく利己主義や個人的な興味を意味することができるものも忘れてはならない。例 わたくしのない人です わたくしする」

- ・形容詞—最上級

「『もっとも』は名詞としてつぎのようにもいえる。

例 ごもっともでございます もっとものように見えます」

- ・基数

「四・シは死を意味することもある。」

「一箱 一杯 次のようにも言える。

例 馬車はいっぱいです 酒をいっぱいおあがりなさい」

- ・後置詞—の

「次の例は接続詞の項を参照せよ。

例 おどろいたの おどろいたの! お帰りのな? 」

②発音に気を付けるもの

- ・基数

「ひ, ふ, み, よ……………」

最後の母音をわずかに引きずって発音する」

③言い換えられるもの

- ・統辞論 第3章 動詞

「人の噂をしてはならない ならないの代わりに「いけない」という動詞を使うこともできる」

・接続詞「や」

「なにやかや やはもに言い換えられる」

④前後関係でかわるもの

・代名詞 二人称

「てまえ 目上への謙譲, 目下への呼びかけ, 実際にはその場の人間関係, 地位, 疎密により変わる。」

⑤混同を注意するもの

・統辞論 「なる」と「する」動詞

「そうしなければ なりますまい

動詞「なる」を *etre* の意味の動詞「なる」と混同してはいけない。」

⑦時代遅れの言い方や, 俗語・方言への注意

i 時代遅れの言い方・俗語

・動詞 ございます

「ございます・ございまするはすべての活用動詞につけられるが, 少々時代遅れの言い方になる。」

「でござす・でがす・でげすは下劣な言い方である。」

・代名詞

「おいら 俗語」

「おのれはそっけのない言葉で相手を傷つける. 人にはおのれめ! となる」

・接尾辞付形容詞 べき

「きさまのかまうべきことじゃない!はくだけた言い方でよく使われるが, つぎのように言う方がよい. お世話がご無用 余計なお世話だ」

・分詞

「形容詞と動詞の分詞の後に強調の後置詞『は』が続くと一緒に発音される. 俗語である. 例 五時より遅くちゃいけません. 昼寝を長くしちゃ悪いそうだ。」

・統辞論 動詞

「後置詞『に』のつく間接補語をもつ受動形中性動詞

例 きゃつらに來られては困る (俗語)』

・統辭論 補助動詞

「どうも困ってしまった 俗語ではしばしば二つの動詞を結びつけて『困ってしまった』が『困ちまった』となる. これは広く豊かな表現にもなりうる。」

・接統詞 と

「女性や子供の言葉では, といって は って となる. (中略) これらの使い方はよく知られているが賢明に使わねばならない.

例 どっかへ 行くって 先にでかけましたよ.

寒い たって 寒いわけだよ。」

・基数 ひとつ

「俗語として 例 どうか ひとつ ご周旋を願います.

お茶をひとつ おあがりなさい」

ii 方言

・品詞論 動詞

東京では	京都では
おいでなさい, おいでなさいまし	おいでなされ, おいでなさりませ
きてください又はくださりまし	きてくだされ又はくださりませ
いらっしやい, いらっしやりまし	いらっしやれ, いらっしやりませ

・間投詞

「最もよく使われる間投詞は『ね, ねえ』『なあ』『のう』などの助辭で地方によって異なる. 『ね, ねえ』は東京, 『なあ』は京都, そして『のう』は封建時代に使われフランス語の n'est ce pas? に当たる。」

・形容詞

「甲州, 信州などではらしいの接尾辭の代わりにずら, つらを用いる. つまり, そうらしい, ふるらしいの代わりにそうずら, ふるずらが用いられる。」

「『よくない』の意味の『よくあらず』は『よからず』と日常語で使われるが,」信濃地方では『よかろう』の方が使われる」

・間投詞

「『まあ』が何度も繰り返されるのは特に信濃や甲斐地方での驚きの表現である」

⑥使用を禁止するもの

・統辞論 形容詞

「まるい、せまいは『丸くある』『狭くある』ということだが、これらの語の後に動詞をつけて外国人のように言うことは絶対に禁じられます。

例 まるい あります せまい ございます 等」

・間投詞

「接尾辞『め』はすべての語、特に侮蔑の語に付け加えると軽蔑の感嘆符となる。私たちはこの種の言い方を使用してはならない。

例 ふこう—もの め! べらぼう め!」

・所有代名詞

「所有代名詞をつくるために書き言葉では『の』の代わりに『が』を用いることある。話し言葉では『我が国』『我が輩』などがあるが、凝った言い方なので使用しないように。」

4・6 翻訳練習問題

文法書の補遺には翻訳練習問題が掲載されている。初めは「逐語訳練習」と称して猫の呼び名にまつわるイソップ風の話で、句ごとに翻訳がついている。そのあとはⅡフレーズ選集として、先に紹介した用例文にもあるような「願ってもない嬉しいことだ」「後の百より今五十は確かでございます」といった短文がフランス語訳とともに51ほど載せられる。

そのあとにⅢ会話断章として、実際の長めの会話が8組ほど紹介される。そして最後にⅣ文法分析として、若い女性が婚家を出るという心情を述べたものが続く。いずれも日本語としてこなれているもので、バレーが目指した口語のレベルの高さを物語る。ここでは、Ⅲ会話断章第8とⅣ文法分析に用いられた会話文を翻字して紹介する。

・第8会話断章

「とんだお邪魔申して、心づきませんでした。お暇いたしましょう。」

「まあ、よいではございませんか？かれこれ11時に近うございますから、今少し、お話あそばし、時分になりますから、お昼でも召し上がってくだ

さいまし。」

「まことにありがとうございますが、今日の話のカネが待ちに待っているから、今日はお預けと願ひ、この後は、たびたび参上いたします。」

「どうぞ。次の日曜にはぜひご一緒においでくださいませ。きっとお待ち申して楽しんでおります。」

「承知つかまつりました。お天気も続きそうですから、必ず参上いたします。さようなら。」

・文法分析

「おイヨさん、どうして石山さんを出ておしまいなすったの!」こう無遠慮に尋ねられてみると、私は答に苦しむ。でも答えないわけにはいかないから、「何分あすこのおっかさんという人が・・・」と何も知らない姑の咎にして人を欺き、世を欺き、さて自分の(ママ)欺いているがさすがにこれは快くない。

しかし、それならば仲人の大川さんの顔をたててもう一度元の鞘に納まるかというのに、それはまっぴら、まっぴら!わたしは辛抱がないといわれても、お転婆と言われても、強情と言われても二度と再びあの石山の籠を守ってあんな人のそばにいることは、もう、もう、まっぴら!まっぴら!

5 まとめ

バレーの文法書は実用的でわかりやすく、なおかつ、できるだけ理論的な裏付けを記載している。チェンバレンをはじめ、当時の研究書を参照し、ていねいに作られているからである。そのうえ、方言や俗語への配慮も細かい。後世、この文法書を専門家(たとえばガルニエ女史)が重要であると認めたのもっともなことである。この文法書の初版をモラエスは所持していたのである。モラエスの言語への慧眼が伺われる。

本稿ではモラエスが学んだ日本語文法書の概略、特徴を示した。一般的にポルトガル人は、英語より同じラテン語系のフランス語の方が得意である⁵⁶。モラエスは英語の文法書ではなく、唯一このフランス語の文法書を

56 現在の若いポルトガル人は英語も達者であるが、筆者がポルトガルやブラジルを訪ねたとき(1978～2005 複数回)は、年配者からはフランス語で話しかけられたことが多かった。

所持していた。モラエスはバレーの文法書により合理的に日本語を学び、生き生きとした用例文を楽しんだことだろう。

なお、モラエスの蔵書には、次のようなものも見られ、いずれも国会図書館あるいは国際交流基金の図書室で閲覧可能である。モラエスの研究家およびフランスにおける日本語学史専門家のさらなる研究が俟たれるところである。

Kuroda, Takuma(1898) *Petit cours de Japonaise, Pour Faciliter*,Yokohama, PubliéPar L'auteur.

Kobayashi (1897)*Japanese self taught*,Yokohama, Kelly & Waish.

Chamberlain(1898)*Things Japanese*, J.Murray.

参考文献

- Garnier, Catherine (2013)*Two centuries of Japanese Linguistics in France:1825 - 1995*. *Cipang - French Journal of Japanese Studies, English Selection*.
- Rodrigues, João/Rémusat, Abel(1825)*Éléments de la grammaire japonaise*, Paris, Libr. e Orientale de Dondey - Dupré Père et Cils.
- 金子弘 (1992)「西洋人の日本語動詞活用型の把握」『日本語日本文学』創価大学。
- チェンバレン, 大久保恵子編・訳 (1999)「『日本語口語入門』第2版翻訳」笠間書院 (笠間叢書 327)。
- チャンブレン著, 丸山和雄ほか訳 (1999)『日本語口語文典:全訳』おうふう。
- 中島昭子 (2001)「パリ外国宣教会所蔵日本関係史料の研究」『研究キリシタン学 (4)』キリシタン学研究会。
- 桑原雄三 (1960)「フランス語における文法用語」『教養論叢 (6)』慶應大学法学会。
- 飯田史也 (1990)「19世紀フランスにおける日本学の進展 - 日本語文法書の発達を中心にして」『福岡教育大学紀要第4分冊教職科篇 (39)』福岡教育大学編。
- 飯田史也 (2013)「20世紀はじめのフランスにおける日本語テキストの考察: ジョセフ・ドトルメールの” Le Premier Livre de Japonais”」『福岡教育大学紀要第4分冊教職科篇 (62)』福岡教育大学編。
- モラエス著岡村多希子訳 (2000)『モラエスの旅—ポルトガル人外交官の生涯』彩流社。
- モラエス著花野富蔵訳 (1969)『定本モラエス全集 I~V』集英社。

